

月光川水系と淡水魚

一万年以上前の氷河期、日本海は塩分の少ない汽水湖でした。南方の魚はより北へ、北方の魚はより南へと自由に移動し、分布を縦横に広げていたと考えられます。



ところが、氷河期が終わると、日本海の塩分が多くなり、真水以外のところを通ることができない淡水魚は、隣の川に移動したくてもできない状態に封じ込められてしまいました。移動を止められた時点で、北上しすぎた暖水系（南方系）の魚、南下しすぎた冷水系（北方系）の淡水魚には、気候や水温、水質の変化などで生息環境が合わなくなった場合、環境へ順応するか、適応する場所を探すか、あるいは死滅するかの運命が待っていました。月光川水系ではどうだったのでしょうか。

現在、月光川水系には50種前後の淡水魚が生息していますが、流程20数キロの短い川にしては、驚くほど多くの種類です。その秘密は、鳥海山を水源とする月光川水系の各支流が個性を持っていたからのようです。

牛渡川、滝淵川は、100%湧水を水源にされていて、年間を通じて水温が安定し、冷水系の魚の格好の棲息地になっています。月光川本流、高瀬川は、流程が長く、上流・中流・下流の区別がはっきりしていて、多様な生息環境を作り出しています。

また、八ツ面川、西通川や用水路は、昔からなじみのあるメダカ、フナ、ドジョウといった中流域を代表する魚の棲家になっています。

つまり、月光川水系は、多様な顔を持った支流によって作り出された、日本海側に典型的な河川の魚層を現在に残している貴重な川なのです。

淡水魚は、広範囲に移動できず、環境の激変に順応できない弱い生物です。一度減んでしまうと回復は難しく、その遺伝子を永久に失ってしまいます。

月光川水系は、淡水魚の遺伝子を保存する「銀行」の役割を求められている川なのです。

(「遊佐自然図鑑Ⅱ舞魚の川」より)